SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

エドワード・ヤンの恋愛時代　4K レストア版
（獨立時代／A Confucian Confusion）

1994 年／台湾映画
配給：ビターズ・エンド／129 分

2023（令和 5）年 8 月 24 日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data　２０２３－９９

監督・脚本：楊德昌（エドワード・ヤン）
出演：倪淑君（ニー・シューチン）／陳湘琪（チェン・シャンチー）／王維明（ワン・ウェイミン）／王柏森（ワン・ポーセン）／李芹（リチー・リー）／鄧安寧（ダニー・ドン）／王也民（ワン・イエミン）／陳以文（チェン・イーウェン）／閻鴻亜（イエン・ホンヤー）／陳立美（チェン・リーメイ）

みどころ

中国ニューウェーブの代表がチャン・イーモウ（張芸謀）とチェン・カイコー（陳凱歌）なら、台湾ニューウェーブの代表はホウ・シャオシェン（侯孝賢）とエドワード・ヤン（楊德昌）。エドワード・ヤン監督の代表作は『牯嶺街（クーリンチェ）少年殺人事件』（91 年）だが、その 3 年後に、前作とは全く異なるアプローチで現代の台北で生きている男女を描いた本作は、“エドワード・ヤン監督のフィルモグラフィの中でも最大の野心作”だ。

そのことを濱口竜介監督は彼特有の造語で「重厚な歴史青春群像劇」から「軽佻浮薄な都市的恋愛模様」に変わっていったと表現しているが、さすが、カンヌ国際映画祭で脚本賞を受賞した映画監督だけあって、これは言い得て妙だ。

戦後復興を急速に成し遂げた日本は、1960 年代の「所得倍増計画」と「高度経済成長政策」でひた走りに走ったが、1996 年に総統の直接選挙を実現させた台湾では、それまでの戒厳令や白色テロの悪夢を乗り越えて、急速な経済成長を進めていった。とりわけ、首都台北の経済成長が東京以上にすごいことは、本作のスクリーンを見れば、よくわかる。

他方、60～70 年代の日本は『青い山脈』（63 年）に代表される、夢と希望に満ちた真っ直ぐな経済成長への道だったが、①国共内戦、②本省人と外省人の対立、③戒厳令と白色テロ、④「反攻大陸」という状況下で苦悩してきた台湾の若者たちには、各人各様の“屈折”があるので、その屈折ぶりや屈折度に注目！60 年代の『青い山脈』とも 90 年代の『東京ラブストーリー』とも異質な、10 人の男女が濃密な会話劇で織りなすエドワード・ヤン（楊德昌）監督の青春群像劇をしっかり鑑賞し、タップリ楽しみたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■『牯嶺街少年殺人事件』と並ぶ台湾の名作を鑑賞！■□■

“中国ニューウェーブ”を代表する（第 5 世代）監督がチャン・イーモウ（張芸謀）とチェン・カイコー（陳凱歌）なら、“台湾ニューウェーブ”を代表する監督がホウ・シャオシェン（侯孝賢）とエドワード・ヤン（楊德昌）。そして、1947 年生まれのホウ・シャオシェン（侯孝賢）監督の代表作が『悲情城市』（89 年）（『シネマ 17』350 頁）なら、1947 年生まれのエドワード・ヤン（楊德昌）監督の代表作は映画史上に屹立する『牯嶺街（クーリンチェ）少年殺人事件』（91 年）（『シネマ 40』58 頁）だ。

『牯嶺街少年殺人事件』直後の 1994 年に、前作とは全く異なるアプローチで、現代の台北で生きている男女を描いた本作は、“エドワード・ヤンのフィルモグラフィの中でも最大の野心作”と言われている。2022 年のヴェネチア国際映画祭で、そんな映画の 4K レストア版がワールドプレミアされるやいなや、トロント、NY、東京と世界中の映画祭が相次いで上映し、「90 年代の台北で描かれるすべてのことは、21 世紀の大都市でも起こることだ」と絶賛されたらしい。しかして、本作のチラシには「早すぎた傑作が 4K で蘇る」と謳われているが、それは一体なぜ？

なお、本作のチラシには、財閥の娘・モーリー（倪淑君／ニー・シューチン）と並んで本作のヒロインとして登場する、モーリーの親友・チチ（琪琪）（陳湘琪／チェン・シャンチー）と、その大学時代からの恋人ミン（明）（王維明／ワン・ウェイミン）が映っているが、そこでのチチの圧倒的な美人度にも注目！

■□■重厚な歴史青春群像劇から軽佻浮薄な都市的恋愛模様に■□■

本作のパンフレットには濱口竜介氏（映画監督）の「エドワード・ヤン　希望は反復する」があるが、これは全 6 ページにわたる超力作だから必読！そこでの最初の問題提起は、次の通り実に鋭いものだ。すなわち、

> 加速度的な経済発展に浮かれる社会における、生身のからだの疲弊と消尽こそを不可避の問題と看破しつつ、それをギリギリでも「恋愛コメディ」と見えるような枠組みへと落とし込んだエドワード・ヤンの洞察と手腕に、遅まきながら深く驚いたのだった。

その上で、濱口監督は次の通り指摘している。すなわち、

> 1990 年代半ば、待望の新作として『エドワード・ヤンの恋愛時代』を見た観客たちは深く驚いたろう。動揺したかもしれない。ひとまずは「重厚な歴史青春群像劇」とでも言えそうな傑作『牯嶺街少年殺人事件』から 3 年を隔てて発表された『恋愛時代』は一見したところ「軽佻浮薄な都市的恋愛模様」といった印象で、テーマは様変わりして見える。それだけでなく、後述するように形式の面でも相当に異なっており、両作の間には「亀裂」とも言いたくなるようなギャップがある。

ここでの「重厚な歴史青春群像劇」VS「軽佻浮薄な都市的恋愛模様」は濱口監督の特有の造語だが、さすがカンヌ国際映画祭で脚本賞を受賞した映画監督だけあって、その言葉

（表現）は、言い得て妙だ。私の感覚では、『牯嶺街少年殺人事件』はエドワード・ヤン監督の本質的な部分を知った上で、深く切り込まなければ容易に理解できない映画であるのに対し、本作は軽佻浮薄な気分で十分楽しめる映画なのかもしれない。

日本では1990年代のバブル時代に『東京ラブストーリー』（91年）というトレンディドラマが大ヒットしたが、私に言わせれば、これこそ、日本型バブルの時代に生まれた「軽佻浮薄な都市的恋愛模様」ドラマだった。しかし1994年に台北を舞台として公開された本作は、「軽佻浮薄な都市的恋愛模様」でありながらも、90 年代の日本のトレンディドラマとは全く異質なものだ。そのことは、本作の原題が『獨立時代』、そして、英題が『A Confucian Confusion』（儒者の困惑）とされていることをよくよく考えれば明らかだ。

■□■60 年代の日本の経済成長はなぜ？その特徴は？■□■

1945年8月15日に終戦（敗戦）を迎えた日本は、『リンゴの唄』（46年）が流れる中、サンフランシスコ講和条約（51年）、朝鮮特需（50～52年）等の中で“戦後復興”を進めた。そして、1956 年の『経済白書』の中で、「もはや戦後ではない」と宣言し、池田勇人首相が所得倍増計画を打ち出した後の日本は、高度経済成長の軌道に乗った。とりわけ、1964年10月に開催された東京オリンピックは、そんな日本の復興と豊かさを世界に知らしめた画期的なイベントだった。1960年の日米安保条約（改定）によって、軽武装、経済重視路線を確立させる中、まさに 60 年代の日本の高度経済成長ぶりは驚くばかり。1970年の大阪万博がそれに輪をかけたのはもちろんだ。

そんな中、小説では源氏鶏太の『三等重役』（51～52年）がヒットし、これは東宝が『新・三等重役シリーズ』（59～60年）として映画化した。歌では1962年に植木等が歌った『スーダラ節』が大ヒットし、『無責任シリーズ』（62～71年）等のクレイジー映画が大ヒットした。私が3本立て55円の日活映画を見始めたのは1961年に愛光中学に入学した後だが、その当時の邦画の隆盛ぶりはすごかった。吉永小百合と浜田光夫の純愛コンビをはじめ、人気俳優はほぼ“年間12本”も撮っていたほどだ。これからの日本は前向き、そして、そこでは若者たちが主役。そんな思いを込めた日活の代表作が、石坂洋次郎の原作を映画化した青春群像劇『青い山脈』（49 年）だった。また、世界的大都市に復活しようとする東京の銀座を舞台にした、石原裕次郎、浅丘ルリ子コンビによる“珠玉の大人のラブストーリー”たる『銀座の恋の物語』（62 年）もあった。おっと、それとは逆に、深窓の令嬢とチンピラヤクザとの純愛と悲哀を描いた藤原審爾の原作を映画化した、吉永小百合×浜田光夫コンビによる『泥だらけの純情』（63年）は、今なお私の目に焼き付いている。

■□■90 年代の台湾の経済成長はなぜ？日本とは全く異質！■□■

このように、日米安保条約の恩恵を受けて高度経済成長路線をひた走った60～70年代の日本に対して、台湾は1945年の日本統治終了後も後記の通り、①国共内戦での敗北、②本

省人と外省人の対立、③1949 年から 1987 年まで 38 年間も続いた戒厳令と白色テロ、④「反攻大陸」のスローガン、という大問題点を抱えていたから大変だ。しかし、中華民国（台湾）の初代総統、蒋介石の後を継いだ 2 代目の蒋経国が 1988 年に死去すると、その後継者として李登輝が急浮上！彼の尽力によって、1996 年には台湾初の総統直接選挙が実施され、李登輝が台湾初の民選総統として第 9 期総統に就任した。日本は 1886 年の明治維新によって近代化と民主主義が急速に進んだが、台湾では、この 1996 年の総統直接選挙以降、急速に民主化が進んだわけだ。ちなみに、1996 年の直接選挙に先立つ 1994 年には、①第 9 期総統選から直接選挙を実施することを決定すると共に②総統の「1 期 4 年・連続 2 期」の制限をつけて、独裁政権の発生を防止する規定も定められた。

1994 年に公開された本作は、まさにそんな台湾の激変期を生きる男女 10 人の青春群像劇なのだ。

■□■出演者の多くは『牯嶺街少年殺人事件』と共通！■□■

「小公園」と「217」という 2 つのグループに分かれて抗争を繰り広げる若者たちの姿を描いた 236 分の超大作、『牯嶺街少年殺人事件』を観て、私はミュージカルの傑作『ウエストサイド物語』（61 年）を思い出したが、その共通点はあくまで表面上のものだった。なぜなら、『牯嶺街少年殺人事件』は、①国共内戦の敗北、②本省人と外省人、③長く続いた戒厳令と白色テロ、④「反攻大陸」というスローガンと、プレスリーをはじめとした洋楽への憧れという歴史的背景の中での、若者たちの抗争を描くものだったからだ。つまり『牯嶺街少年殺人事件』は、あくまであの時代の台湾特有の映画だった。

同作はエドワード・ヤン（楊徳昌）監督の代表作になったが、それから 3 年後の本作には、豊かになった台北市内を舞台として、抗争グループの中心人物として活躍した若者たちが少し成長し、男はカッコ良い背広姿で、女はキレイなドレスやスーツ姿で登場するので、その“対比”に注目！

『牯嶺街少年殺人事件』の舞台になったあの台北市が、わずか 3 年後に本作に見るような近代的な大都市に成長し、『牯嶺街少年殺人事件』でチンピラだった男女が、わずか 3 年後に本作のような自由奔放な（？）恋愛模様を繰り広げる男女に成長したとは！

■□■本作に登場する 10 人の男女たちの“屈折度”に注目！■□■

60 年代に日本を席巻した『青い山脈』は「若くあかるい 歌声に 雪崩は消える 花も咲く・・・」という主題曲を聴いても、とにかく前向きで明るいものだった。それに対して、本作に登場する 10 人の男女たちは豊かさを求めてそれぞれの努力をしながらも、各人の“屈折度”が強いのでそれに注目！もちろん、その内容とレベルは各人各様だから、本作では、“濃密な会話劇”の中で浮かび上がるそれをしっかり鑑賞し、分析したい。

■□■2 人のヒロインのキャラは？その対比に注目！■□■

本作全編を通じた 2 人の主人公はモーリーとチチ。財閥の娘で出版や映像を手広く扱う

カルチャー・ビジネス会社の社長であるモーリーの経営者としての能力はイマイチらしい。本作冒頭、気に食わないスタッフの一員である社員のフォン（小鳳）（李芹／リチー・リー）の“クビ切り”を一方的に宣言している風景を見ていると、「この女社長ではダメ」ということがよくわかる。

他方、モーリーの大学時代からの同級生で、今はモーリーの会社でモーリーの右腕として働いているチチは、愛嬌ある性格でコミュニケーション能力も高く、リストラから再就職の世話までそつなくこなす優等生だ。ところが、そんなチチも、「いい子のフリをしている」と周りから思われていることに悩んでいるようだから、アレレ・・・。

本作の鑑賞については何をおいても、この2人のヒロインのキャラの対比をしっかりと。

■□■2人の婚約者のキャラは？その役割分担は？■□■

モーリーの婚約者は、同じ大財閥の御曹司であるアキン（阿欽）（王柏森／ワン・ポーセン）だが、こちらも“経営能力はゼロ”で、会社のことはすべてお抱えコンサルタントのラリー（Larry）（鄧安寧／ダニー・ドン）に任せっぱなしだ。もっとも、この単純でお人よしの2代目は、両家の親同士が決めた結婚ながら、いつかはモーリーと愛を育みたいと願うロマンチストでもあるところが面白い。また、ラリーはフォンと不倫関係にあったから、後述のように、「モーリーが同級生のバーディ（Birdy）（王也民／ワン・イエミン）と浮気している」というニセ情報を流す他、フォンの救済のためにひと肌脱ぐことになるので、その役割に注目！

他方、チチの恋人のミンは、大学時代からの同級生で、役所に勤める公務員だ。彼はチチとの結婚を考えているが、チチの意思や感情を無視した言動が仇となり、最近うまくいっていないから、悩みは多いらしい。また、ミンは公務員の仕事は「どこまで公平性に徹し、どこまで私情を捨てるか」が難しいことを、汚職のために捕まり、退職した父親から学んでいたらしい。そのため、同僚のリーレン（立人）（陳以文／チェン・イーウェン）に、工期が遅れて違約金を請求されている業者に対して「助けてあげたら？」というアドバイスをしたところ、そのアドバイスに従って書類を書き換えたリーレンが、文書偽造と収賄を理由に解雇されてしまうという大変な結果になってしまったから、アレレ・・・。

本作の鑑賞については、あまりにも対照的なモーリーとチチの婚約者のキャラもしっかり深掘りしたい。

■□■ホンモノVSニセモノに拘泥する2人の男のキャラは？■□■

他方、モーリーの姉（陳立美／チェン・リーメイ）と今は別居中の夫である小説家（閻鴻亜／ヤン・ホンヤー）と、モーリーとチチの大学時代の同級生で、今は人気の舞台演出家のバーディの2人は、モンモノVSニセモノという問題を内包させている当時の台湾人特有のキャラの代表として（？）本作に登場しているので、それに注目！

60年代の日本の若者たちは、安全保障や平和問題は横において（無視して）、ひたすら経済成長だけを目指せばよかったのに対し、本作に登場する10人の男女には、急速な経済

成長を遂げる都市、台北で生きていく中で、ややもすればそのインチキ性に気づき、目的を失ってしまうという不安がつきまとっていることがよくわかる。本作では、台湾の青春群像劇特有のそんな“屈折ぶり”をしっかり理解したい。

■□■大事件が勃発！その解決に会話劇は機能するの？■□■

本作は「都市に生きる男女の姿を二日半の時間で描き切り、時代を先取りした青春群像劇」。しかして、それぞれの“屈折ぶり”を抱えた 10 人の男女たちによる本作の青春群像劇は、濃密な会話劇の中で次々と大事件が勃発していくので、それに注目！

その第 1 は、女グセが悪く、自分の利益のためなら平気で嘘をつく男、ラリーが、アキンとモーリーの仲を攪乱させるべく「モーリーが同級生のバーディと浮気している」というニセの情報を流したこと。それでなくとも、ワガママで経営者としての能力はイマイチのモーリーは、フォンがラリーの愛人であることを知ると、即“解雇宣言”を下したから、問題がさらに広がっていくことに。

他方、モーリーは何か問題が起こるたびにその処理をチチに委ねていたから、フォンへの解雇通告も当然チチの役目だ。ところが、チチにはもう 1 つ、今はモーリーの姉と別居中の小説家との間で“著作権を巡る交渉”をまとめ上げるという重要な任務が与えられていたところ、その任務の遂行を巡って次第にモーリーとチチの間に意見の対立が生まれてきたから、大変だ。

さあ、そんな風に次々と起こる大事件の解決に、エドワード・ヤン（楊德昌）監督の脚本による濃密な会話劇はどこまで機能するの？

2023（令和 5）年 8 月 29 日記